

精神科 リハビリテーション 評価法ハンドブック

● 編著 ●

早坂友成 杏林大学保健学部リハビリテーション学科

岩根達郎 京都府立洛南病院リハビリテーションセンター

森元隆文 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

中外医学社

序

編者3名が本書の企画ミーティングをはじめて行ったのは2020年11月でした。精神科リハビリテーションに役立つ書籍を企画したいと、当初から様々なアイデアを共有しました。そのうえで、現在の精神科に必要なとされていることは、患者や対象者を理解するための方法であるとし、本書の企画を開始しました。

私が精神科リハビリテーションに身をおくようになった当時から、「患者さんは最良の師」という言葉があり、私も日々の臨床において大切にしてきました。しかし若き日の私は、当時からこの言葉が何処か腑に落ちないと思っていました。患者さんに向き合おうとするほど、すべきことが見えなくなってしまう感覚を今でも覚えています。当時は患者さんを理解するための評価法などは持ち合わせておらず、会話し交流し、作業活動を共にすることで毎日が終わる臨床であったと反省しています。これらを背景に、本書では精神科に必要な検査や活動とおした評価の視点をまとめ、臨床だけではなく、教育、研究にも役立てられる書籍にすることを目指しました。

本書の第1章では精神症状、生活能力、心理的側面などを定量化、数量化できる検査法や調査法などを解説し、第2章では精神科リハビリテーションにて活用されている活動を用いた評価法を解説しました。著者は、臨床、研究、教育の第一線で活躍している総勢89名の作業療法士です。

精神科リハビリテーションに従事するすべての方々の一助となるハンドブックになれば幸いです。

2023年2月

編者代表 早坂友成

このなかには定義が重複しているカテゴリがあること、さらには検査・評価尺度のなかにはこれらのカテゴリをまたいで様々な側面を評価できるものもあることから、カテゴリ名や該当する尺度の配置に議論の余地はあると思われる。今回の尺度の選択にあたっての編者3名での議論を通した任意のカテゴリ名・分類であることを前提に、読者が検査・尺度を探すための一助として活用していただきたい。

また、各検査・評価尺度についての解説は以下の構成となっている。

- ①概要: 各検査・評価尺度の開発時のねらい、(同種の検査・評価尺度と比較した)特徴・特色
- ②内容: 各検査・評価尺度にはどんな下位検査・下位尺度、項目が含まれているか
- ③実施法: 実施にあたって必要なトレーニングや資格、準備、実施手順や留意点
- ④結果の解釈: 得点化のプロセスや結果の見方、判定基準
- ⑤リハビリテーション研究・臨床での活用: 信頼性や妥当性についての情報、どのような研究で使用され、臨床場面でどのように活用できそうか

本章は、「診療記録や書籍・論文内で出てきた検査・評価尺度がどんなものを調べたい」「研究・臨床場面で使えそうな検査・評価尺度を探したい」という時に役立てていただけることを目指して構成した。一方で、紙面には限りがあるため、各検査・評価尺度を臨床・研究場面で実際に使用するうえで必要な情報をすべて記載・掲載することは困難である。また、検査・評価尺度によって著作権が異なるため、本書にて記載・掲載可能な内容も様々である。そこで、本書を通して必要な情報にアクセスできるよう、各検査・評価尺度の解説と「文献」においてマニュアルや書籍、論文の情報やURLを掲載している。検査や評価尺度を正しく用いるために、さらに正しく解釈して対象者にフィードバックして関係者に伝えるためには、原典である書籍や論文、マニュアルを確認し、必要なトレーニングや練習を積んだうえで用いることが求められる。その手がかりとして、本章の解説と「文献」を活用していただきたい。

精神科リハビリテーションにおいては、検査や評価尺度で数値化できない、あるいは解釈することが難しい側面を評価し理解しようとする姿勢は必須である。一方で、介入の効果を明らかにする際、あるいは対象者自身や家族、関係者が変化を実感する際に検査や評価尺度を活用できれば大きな助けにもなる。本章を通じて「どのような検査・評価尺度があるのか」「どのように使われているのか」を知っていただき、「どの対象者の何をみるのに使えそうか」「どの介入の効果判定に使用できそうか」を考え、実践して頂ければ幸いである。

〈森元隆文〉

B. 知的機能・認知機能: 知的機能

7

ウェクスラー式成人知能検査 (WAIS)

1 概要

ウェクスラー式知能検査は David Wechsler が原著者で、成人用である Wechsler Adult Intelligence Scale (WAIS)・児童版である Wechsler Intelligence Scale for Children (WISC)・幼児用である Wechsler Preschool and Primary Scale of Intelligence (WPPSI) の3種類がある。WAIS の適応年齢は 16 歳 0 カ月～90 歳 11 カ月である。WAIS の最新版である WAIS- IV の日本語版は日本版 WAIS- IV 刊行委員会で作成され 2018 年から利用され始めている。

2 内容

WAIS- IV の内容は標準的な実施順に「積木模様」「類似」「数唱」「行列推理」「単語」「算数」「記号探し」「パズル」「知識」「符号」「語音整列」「バランス」「理解」「絵の抹消」「絵の完成」の 15 (基本検査: 10, 補助検査: 5) の下位検査で構成されている。このうち、「語音整列」「バランス」「理解」「絵の抹消」「絵の完成」が補助検査でその他が基本検査である。基本検査だけですべての合成得点が得られるが、基本検査が無効となった場合に、合成得点を算出するために補助検査の得点を代用ができる。ただし「語音整列」「バランス」「絵の抹消」は適応年齢が 16 歳 0 カ月～69 歳 11 カ月なので、70 歳以上の者は得点を得られない¹⁾。

3 実施方法

実施方法と採点法の詳細は、日本版 WAIS- IV 知能検査 実施・採点マニュアル¹⁾ に、教示の仕方など具体的な実施方法の説明が記載されているので、これに従って実施する。

日本語版販売社の日本文化科学社によると、「検者は保健医療・福祉・教育等の専

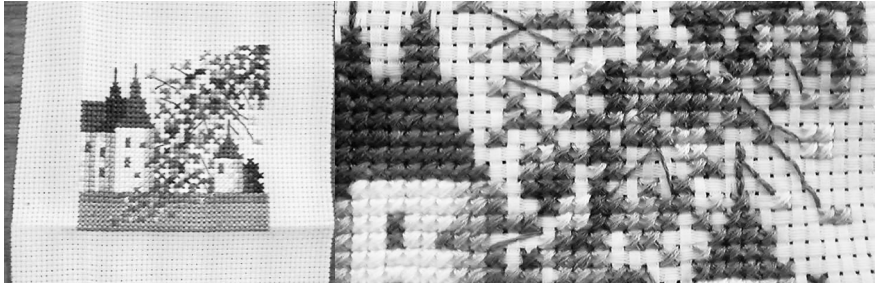
1 手芸①（裁縫，刺繍，フェルト手芸）

1 作業の紹介^{1,2)}

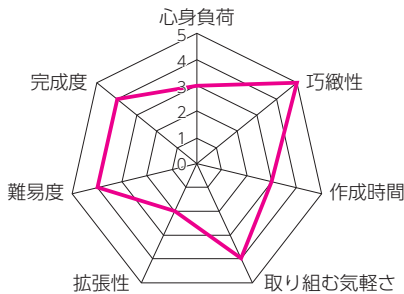
手芸は専門的な技術がなくても取り組みが可能である。刺繍は布に糸で絵や模様を縫う，刺し子は布に図柄を縫うものである。フェルト手芸はフェルトを使用した手芸全般を指す場合が多く，裁縫という呼び方では，布を縫い合わせて形にすること（洋服，袋などの布製品）を指す場合が多い。作業療法ではこれまで比較的良好に使われてきたが，時代の流れの中で作業療法士自身に経験が少ない場合も多く，積極的な利用は減少している印象がある。対象の年齢や性別，疾患を選ばず使用可能であるが，文化的な背景としては女性の作業という側面が強い。作品の大きさや難易度を選ぶことで段階づけしやすく，中断も容易であり，評価・治療として利用しやすい。

作品の詳細・確認事項

コスト	数百円～数千円
材料／道具／準備	布・フェルト，糸，針（ミシン），刺繍枠，ハサミ，チャコペン，手芸用ボンドなどそれぞれを買い集めるかキットを利用
内容／種類／目的	日用品の布製品（袋，クッションなど），マスコット（フェルト手芸）
作品や工程への印象	手作り感がある。裁縫・刺繍は日常生活で実用的な作品が多い。
留意点	修正は可能だが，糸をほどいてやり直し（縫い直し）になったり，一度貼ったフェルトを剥がして貼り直すため，頻度が多いと失敗感につながりやすい。針，ハサミなど怪我や紛失に注意が必要。



[図1] クロスステッチ（右上：拡大）



作業評価レーダーチャート：5段階評価 記載評価

身体負荷	3	基本的には椅子座位（立位，臥位でも可能）．ある程度の視力，視覚情報の処理が必要．主は両手動作．
精神負荷	3	理解力や判断力，集中力，注意力が必要．デザインや図案から作成する場合は創造性が必要．
巧緻性	5	作品難易度によるが，巧緻性は高い．
作成時間	3	作品の大きさによる．1時間～数日．
取り組む気軽さ	4	経験者は取り組みやすい．ただし，経験者でも視力低下してくると回避的．
拡張性	2	基本的には個別作業．並行作業であれば，道具の共有や作品を介した交流が生まれる．
難易度	4	刺し子は比較的簡単，その他は縫い方の手順や工程が多く，難しい．
完成度	4	製作者の技量に左右されやすいが，キットを使用すると見栄えがよく仕上がりがやすい．

2 評価ポイント

身体機能面：

作業全般を通して、上肢・手指の機能（筋力、関節可動域、障害の有無）の評価ができることはもとより、作業姿勢の観察により、姿勢の癖・保持機能・耐久性などが評価できる。手工芸全般にいえることだが、薬剤性パーキンソンニズムなどの錐体外路症状の有無と作業への影響性を評価する。裁断など、一部は立位作業の方が行いやすい場合もあり、自分の身体能力にあわせて作業姿勢を変更できるかも評価のポイントとなる。針穴に糸を通す工程に始まり、図柄など布に描かれた線と縫い糸のズレ、裁断のズレなどから、視力や目と手の協応性、巧緻性などが観察できる。両手動作が多く、左右協調した動き、円滑な連携動作が行えるか観察する。

精神機能面：

運針・裁断など、針・刃物の使用があり、注意が払えるか観察する。図案や印、線に沿って縫い進めるため、注意・集中力や持久性を把握できる。説明書（必要な道具材料、準備工程、進め方など）、また図解の理解がどの程度できるかを評価する。製作における手順や説明は図解されている場合が多く、視覚情報の処理能力を知ることでもできる。材料や道具を丁寧に正しく扱えるか、作業・作品の正確さや綺麗さを見ることで認知機能を評価できる。空間認知の障害に影響して、精神病圏の対象者は机上の道具や教本内の当該箇所を、検索の不十分さや見落とし、見逃す特徴があるため、観察・評価するとよい。キットや教本を使わない場合は、製図・デザイン、材料の選択や準備など自由度が高いため、創造性があるか、計画性があるか、不十分な場合に助けを求められるか、といった点が評価できる。

環境関連性：

道具を置く、作品を広げる広さの机、周りと手が当たらない空間があるとよい。作品によっては、ベッドの上で寝たままでも行えるが、初心者や久しぶりに行う場合には、机上での実施が安定するため、環境因子の影響性が低減し、機能評価に焦点を絞ることができる。視覚情報が多いため、視力や明るさの影響を受ける。布裁断や糸を切った後、布の切れはし・糸くずが洋服、机、床に落ちることがあり、終了後の片付けにも注意を払う。